



仙山線の踏切を1カ所ずつ熱心に調査するメンバー＝22日、仙台市青葉区

仙台ナビ

仙山線の歴史たどる

市民グループ
講座スタート

JR仙山線の歴史的意義を学ぼうと、市民グループが2013年度に企画した講座「仙山線の歴史をたどる」が仙台市内で開かれている。仙山線の鉄道施設や遺構について、来年の土木学会選奨土木遺産認定を目指そうと仙台側で動きだした取り組みの一環。

仙山線は1937（昭和12）

年に全線開業。54年に旧国鉄が仙台―作並間で全国初の交流電

化試験に着手し、その成果として鉄道高速化の技術が10年後の東海道新幹線開業へとつながった。14年が日本初の交流電化試験開始60周年、新幹線開業50周年に当たる。

この節目に仙山線の土木遺産認定を目指そうと、仙台市青葉区の宮城地区（旧宮城町）を中心にした市民団体が集う関山街道フォーラム協議会が申請準備を進める。その一環として同協議会鉄の道部会（加藤栄一部会長）が広く参加を呼び掛けた講座が5月25日にスタート。広瀬市民センターを拠点に、鉄道ファンや写真愛好家、郷土史研究家ら多彩な顔ぶれの市民約10人と部会員が月2回ペースで仙山線の魅力を発掘しようという情熱を注ぐ。

講座は東北大学大学院工学研究科の後藤光亀准教授が講師を務め、当面のテーマを「踏切と鉄橋」に設定。6月22日の第3回講座では初の館外活動として、陸前落合駅から愛子駅にかけて

の踏切8カ所を調査した。メンバーは各踏切で「震災で電車が数日間立ち往生した」「人がやうと通れる幅だが近くの高専生にとって貴重な通学路」といった説明に熱心に耳を傾け、踏切の表示板や電車が通過する様子を写真に収めていた。

7月は山形側で山寺―高瀬間の踏切調査を計画している。加藤部会長は「山形側とも県の枠を超えて交流を深め、遺産登録と沿線活性化を目指したい」と意欲を示している。